

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 23 日現在

機関番号：31605

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530817

研究課題名(和文) 異文化間対人コミュニケーションの葛藤と不適応

研究課題名(英文) Intercultural Conflict and Maladjustment of Interpersonal Communication

研究代表者

内藤 哲雄 (NAITO, Tetsuo)

福島学院大学・福祉学部・教授

研究者番号：20172249

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円、(間接経費) 660,000円

研究成果の概要(和文)：日本に滞在し日本人と対話することで、対人コミュニケーションの違いに気づきやすい外国人留学生が調査対象。暗黙裡のスキーマを吟味するため、各参加者に、(1)日本人との違和感、(2)日本人の特徴、(3)母国の特徴、の3回PAC分析した。海外の多くの国では、日本のように、対立を避けるため自己主張を抑制し、丁寧で曖昧で婉曲的な表現をせず、率直に直截に自分を主張するのが自然である。特異な結果で注目されるルーマニアは、日本でのように相手に気遣い、自己主張を抑制し、丁寧で曖昧な表現形式をとる。そして、ローマ人の未裔だが、ハクスブルグ家、ロシア帝国、オスマントルコの強大な国に囲まれていたことが影響したと語った。

研究成果の概要(英文)：The scheme of communication style, especially common cultural part of it, is subtle and implicit. When we come into contact with a foreigner, we notice cultural differences. We used PAC (Personal Attitude Construct) Analysis. The results show general features of Japanese. There are "considerate for others," "cover real intention and talk ambiguously," and "superficial friendliness." The other hand, subjects of almost every other countries reported "make an acquaintance with even elders easily and speak real intention straightly," "they do not hesitate to ask private matters," "express their emotions and opinions straightforwardly," and "confirm disagreement of their opinions." The case of Romanian deserves attention. She described "adjust communication style to the situation," "take the other person's position in consideration," and "cover real intention and talk ambiguously." She estimated all items positively and told that there were huge countries around Romania.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：対人コミュニケーション 異文化間コミュニケーション コミュニケーション・スキーマ PAC分析 留学生

### 1. 研究開始当初の背景

前任校(信州大学)で留学生センター長を2期4年併任し、異文化適応に強い関心を懐くようになったことから、留学生の異文化適応に関する一連の科学研究費補助金による研究課題に取り組むようになった。本研究は、平成13年度～平成15年度基盤研究C(2)「留学生の孤独感の個人別構造分析」、平成16年度～平成19年度基盤研究C(2)「留学生の異文化間葛藤の個人別構造分析」に続くものである。社会・文化の違いによって、言語、非言語のいずれにおいてもコミュニケーションの仕方に多様な差異がみられ、違和感や葛藤が生じることは、これまでの異文化間コミュニケーション分野での膨大な研究によって明らかにされている。しかしながら、個々の特徴ではなく、それぞれの社会・文化で暮らす人々が獲得している、「この社会でのコミュニケーションの仕方はこうあるべきだ」との暗黙のガイドライン(ルール、規範)の構造全体を「対人コミュニケーション・スキーマ」として取り上げて分析しようとした研究はみられない。ここに、本研究の斬新さ、独自性がある。

### 2. 研究の目的

異文化で暮らす人々の対人コミュニケーションの困難さ、葛藤やストレスは、単語の意味や文法の習得が不十分なことだけで生じるのではない。言語能力が高まり日常会話に不自由しなくなっても依然として直面するのが、対人コミュニケーション・スキーマの違いによる、違和感、葛藤、不適応であろう。(1)出身国に関係なく日本人との対話で生じる違和感や葛藤に共通性はあるのか、(2)日本と母国それぞれでのコミュニケーション・スキーマの特徴は何か、の2つを知ること、違和感や葛藤が緩和され、適応が促進されると考えられる。また、出身国の異なる留学生の結果を比較することで、学問的にも新たな知見を得る可能性がある。そこで本研究では、日本で暮らす外国人留学生を調査対象として、日本人とのコミュニケーションでの違和感や葛藤、日本人のコミュニケーションの仕方の特徴、母国でのコミュニケーションの仕方の特徴をあきらかにすることを目的とした。

### 3. 研究の方法

日本で居住する外国人留学生の個々人が、日本人との交流を通じて獲得していく対人コミュニケーション・スキーマは、日本についての文化的ステレオタイプの知識や日本の文化・社会習慣に規定されて誰もが共通に体験する事柄だけによって構成されるのではない。個々人が個人として体験する内容が重要な構成要素となる。他方で、暗黙裡に獲得されているスキーマに関しては、一つ一つの個別の特徴に気づくことは容易であるけれども、全体構造を意識化・知識化すること

は困難である。

そこで、個人の体験内容を取り上げる質的な分析を行いながら、同時に統計的手法を援用しながら、全体構造を操作的・客観的に析出する方法が必要とされるであろう。このような方法論的課題に適合するのが、筆者内藤の開発したPAC分析である。PAC分析は、質へのアプローチと量へのアプローチの両方を混合して現象に迫ろうとするMix法に属するが、単一事例(協力者1名)の個人的な体験内容(変数)から統計的構造を析出し、なおかつその構造データの解釈を協力者とともに探索していく。協力者1名ごとの個人別分析だからこそ可能となる、質と量のアプローチを同時に用いる特異な技法である。協力者に研究テーマに関する自由連想、連想項目の重要順の判定、項目間の類似度の評定(7段階)を求め、研究者がクラスター分析(ワード法)の処理をする。ついで協力者から、各クラスターのイメージ、クラスターを比較したイメージ、項目単独での補足質問への回答、項目単独での+-0のイメージを聴取する。

本研究では、異なった出身国の留学生を協力者として、(1)日本人とのコミュニケーションでの葛藤(のちに「違和感」に変更)、(2)日本人の対人コミュニケーションの特徴、(3)出身国の対人コミュニケーションの特徴、の3つのPAC分析を試みた。

### 4. 研究成果

研究成果については、「発表論文等」の欄で取り上げた順に各研究のデンドログラムと要旨を記載する。なお、(6)については本年(2014年)6月末までに発表済み。(7)は8月、(8)は9月に発表する。いずれも原稿は投稿済み。

なお、記載可能な文章量に制約があるので、協力者がクラスターについてイメージした内容や補足質問の回答については省略した。

(1)日本人との対人コミュニケーションでの葛藤：ロシア人留学生のスキーマのPAC分析

この研究は、国民みんなが同じような生活をしている国家と思われがちなロシアの留学生から、日本のほうが規則に縛られ紋切り型であることを指摘されたケースである。

クラスター1は、「普段通りでない例外のときに反応できない」～「お互いに努力する」の7項目。「マニュアル通り」「機械で処理」「ロボットばい」など紋切り型にすることが、「日本人としては楽」なのであろうが、「例外的なことが起きたとき反応できない」とのイメージで、<規則的・紋切り型の応答様式>と解釈できる。クラスター2は、「年齢を問わず子供っぽい」～「外国人の日本語がわからないとき、理解しようと頑張らない」の12項目。<規則に縛られ、臨機応変できず、相手を理解しようとしないうちの子供のような日本人>についてのイメージである。

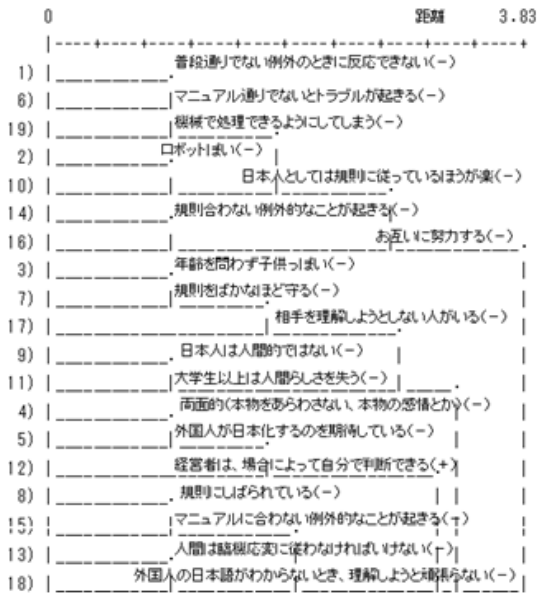


図1 ロシア人留学生による「日本人とのコミュニケーションでの葛藤」

- 1) 左の数値は重要順位
- 2) ( ) 内の+-0は単独でのイメージ
- \*以下の図では注の1)2)を省略

(2)Analyses of Personal Attitude Construct on a Scheme of Japanese Communication Style.

他の多くの国からの留学生と同じような評価をするフランス人留学生に対して、日本と類似した対人コミュニケーション・スキーマを持つルーマニア人留学生との比較研究である。

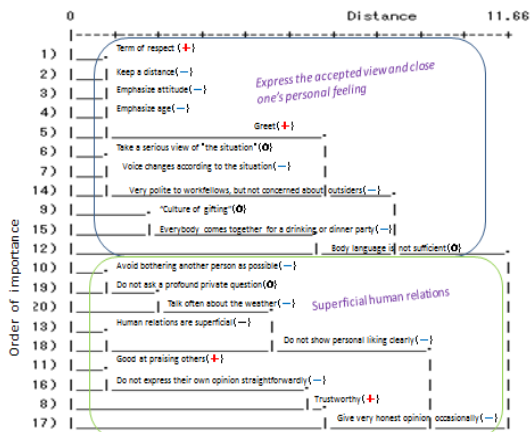


図2 フランス人留学生による「日本人の対人コミュニケーション」

フランスでは、日本のように、対立を避けるために自己主張を抑制するとか、丁寧で曖昧で婉曲的な表現の仕方をせず、率直に直截に自分の意見を主張することが自然であり、許されている。

これに対して注目されるのが、ルーマニア

人留学生の結果である。日本でのように相手に気遣い、自己主張を抑制し、丁寧で曖昧な表現形式をとる。このような理由から日本人の対人コミュニケーション様式に対して好意的に評価する(項目の+-の単独イメージが全て+である)。ルーマニア人はローマ人の末裔であるが、強大な国(西にハクスブルグ家、東にロシア帝国、南にオスマントルコ)に囲まれていたことが影響したのであろうとのこと。

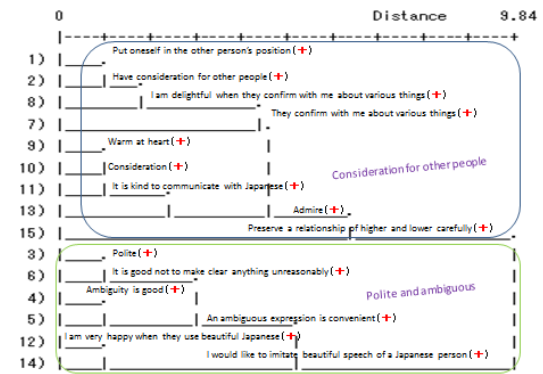


図3 ルーマニア人留学生による「日本人の対人コミュニケーション」

(3)Analyses of Personal Attitude Construct on the Difference of Scheme of Communication Style between Japanese and Indonesian.

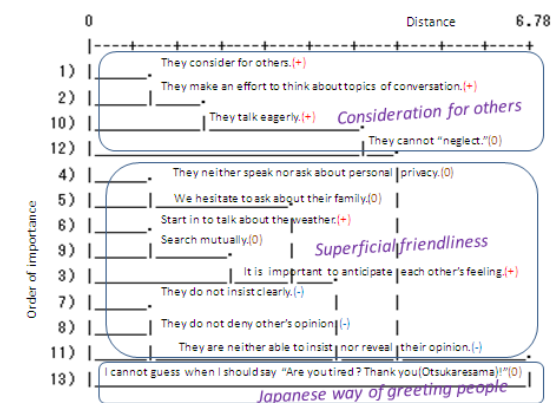


図4 インドネシア人留学生による「日本人の対人コミュニケーション」

国の東端から西端までの距離が北アメリカ大陸のアメリカ合衆国の東海岸から西海岸ほどもあり、大きく分類しても8の多民族、200以上ともいわれる多言語の島嶼国家であるインドネシアからの留学生を対象にした研究である。日常生活では、共通語であるインドネシア語以外の民族語を使う人が多い。

日本では、他者を気遣い、表面的な親密さを大事にし、天候についてなど日本的な形式的挨拶をする。インドネシアでは、異なった意見や特徴を持つ人々とも打ち解け合い、受け容れるし、質問や回答はストレートである。

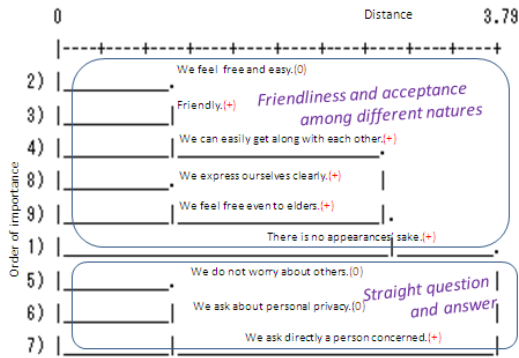


図 5 インドネシア人留学生による「インドネシア人の対人コミュニケーション」

(4) 日本人との対人コミュニケーションでの違和感：ベトナム人留学生の PAC 分析

本研究では、日本の対人コミュニケーション様式が、初対面の頃と、親密になってからでは全く異なることで生じる違和感や当惑が明示されている。

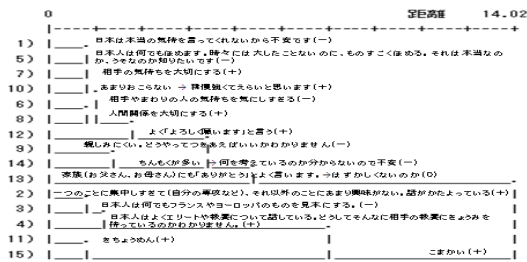


図 6 ベトナム人留学生による「日本人とのコミュニケーションでの違和感」

クラスター1は、「日本は本当の気持ちを言ってくれないから不安です」～「家族 (お父さん、お母さん) にも「ありがとう」と…」の10項目で、初期段階での気遣いほめ合う表面的対話から、親しくなってきた悪口や文句を言う批判的対話への変化であり、交流初期段階での互いを気遣う褒誉的・表面的対話と親和段階での批判的な評価開示。クラスター2は、「一つのこと集中しすぎて…」～「日本人はよくエリートや教養について話している。…」の3項目で、みんなに合わせるいつも同じ内容の話題を指していることから「話題における同調的・常同的傾性」。クラスター3は、「きちょうめん」と「こまかい」の2項目で、仕事では几帳面で細かいことまで決定することが取り上げられていることから「仕事での几帳面で細部まで詰める対話」であるといえよう。

(5) ベトナム人留学生による日本人の対人コミュニケーション・スキーマ

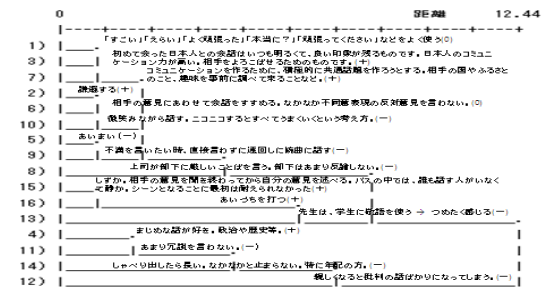


図 7 ベトナム人留学生による「日本人の対人コミュニケーション」

PAC 分析の結果は、率直、直截な表現をする母国のベトナム人と比較し、対照化した日本人の対人コミュニケーションの様式に対して、肯定と否定の両方の感情を懐いていることを示している。

クラスター1は「「すごい」「えらい」……」～「上司が部下に厳しい……」の9項目で、人間関係を大切にするために、人を喜ばせ、人を傷つけるのを避けて、良くないと思っても我慢する「気遣って自己主張しないあいまいさ」である。クラスター2は「しずか。相手の意見を……」～「先生は学生に敬語を……」の3項目で、先生が学生に敬語を使うのは、ベトナムではありえず、冗談、皮肉のニュアンスになる。他者に配慮した会話の仕方として理解できることもあるが、遠慮なく話す母国ベトナム人に比べて冷たいと感じ、＜気遣う話し方への違和感＞と解釈できる。クラスター3は、「まじめな話が好き。政治や歴史等～親しくなると批判の話ばかりになってしまう」の4項目。日本人すべてではなく、私が年配の人と話した経験から気になったこと。話の内容はまじめで堅い。批判の話が多い。長い。相手の話を聞かない＜年配などの一方的な話し方への否定感＞のあるといえよう。

(6) Analyses of Personal Attitude Construct on the Difference of Scheme of Communication Style between Japanese and Chinese.

日本人の対人コミュニケーションの様式の特徴を母国のそれと比較して明示する代表的ともいえる研究である。

日本人の対人コミュニケーションの特徴は、クラスター1では、話の内容の意思疎通よりも地位などに応じての言葉遣いや表情が大事で「内容より話し方」である。クラスター2は、互いが自己主張を抑制し、意思疎通が遅れることを示しており、＜自己主張の抑制と集団決定の遅れ＞と名付けることができよう。クラスター3は、以心伝心を目指し、静かで喧嘩のない話し方を示す「穏やかな以心伝心的対話」であるといえよう。

中国人の対人コミュニケーションについては、クラスター1は、表情やジェスチャー

を隠さず直裁に伝え、冗談も多く賑やかで意思疎通のスピードが速い。しかしクラスター2のように、年齢に関係なく権力を持つ地位の高い人にプッシャーを感じ、出会いの最初は警戒する<権力と初対面で警戒>する話し方である。クラスター3は、話し方がストレートで、率直に意見交換し、深いつきあいがなくても深い内容の話ができる、<ストレートで率直な意見交換>を示すものである。

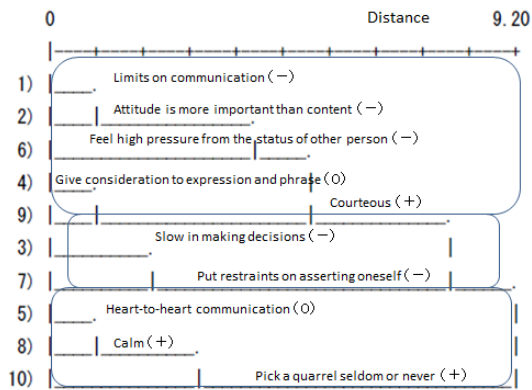


図8 中国人留学生による「日本人の対人コミュニケーション」

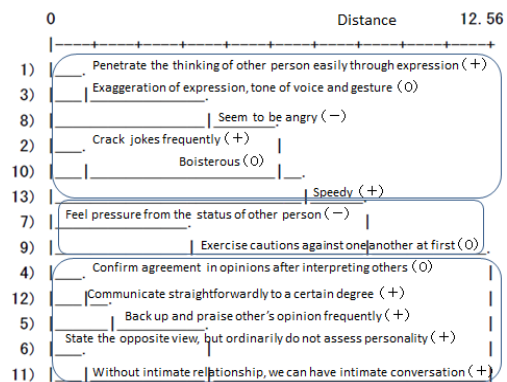


図9 中国人留学生による「中国人の対人コミュニケーション」

(7) 韓国人の対人コミュニケーション・スキーマ：韓国人留学生のPAC分析

母国の対人コミュニケーション様式が著しく変化していることを示すものであり、「コミュニケーション様式の変化」を研究テーマにできることを示す研究成果である。

クラスター1は、「目下の人に格式を整える場合は少ない」と「目上の人と話すとき、気兼ねをする」の2項目で、相手の地位や年齢が上か下か同格かで、敬語、ため口、普通體などの表現の仕方を変える<地位や年齢差を重んじる伝統的なコミュニケーション様式>であるといえよう。クラスター2は、「性急な態度」「反語法を使って話すときもある」の2項目で、ダイレクトに感情や見解を伝えようとする<性急に、強調して伝えたいダイレクト志向>と呼ばれよう。クラスター3は、

「流行語が多い」「最近、若者たちだけのことばがある」の2項目で、テレビの流行語などの影響を受けた若者ことばで、伝統様式に制約されない<若者にみられる新感覚的・簡略的表現>であるといえよう。クラスター4は、「今親にも普通體を使う」と「声で気分をすぐ分かる」の2項目で、<目上目下とも友達の・同格的に伝え合う最近の様式>を意味するといえよう。

クラスター1と2は、伝統的な様式、3と4はテレビやネットの影響で全体が普通體化している最近の様式を示唆する。

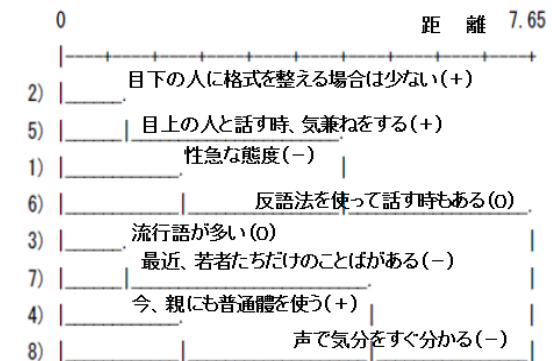


図10 韓国人留学生による「韓国人の対人コミュニケーション」

(8) スリランカ人留学生による母国の対人コミュニケーション・スキーマ

スリランカの公用語は、シンハラ語とタミル語であり、イギリスの植民地支配の後の、シンハラ人とタミル人の対立が解消していない。本研究の結果は、隣国インド、イギリスとの歴史的な背景が、現代スリランカの対人コミュニケーション・スキーマに影響していることを示している。

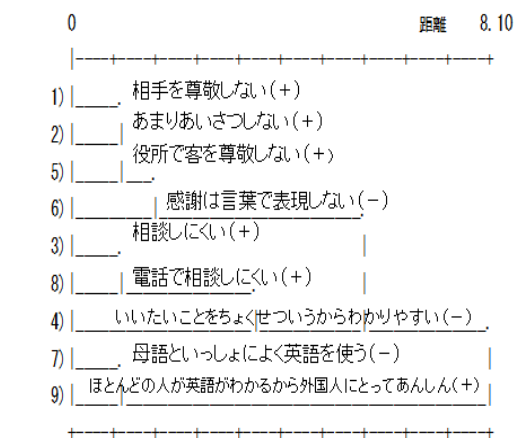


図11 スリランカ人留学生による「スリランカ人の対人コミュニケーション」

クラスター1は「相手を尊敬しない」～「感謝は言葉で表現しない」の4項目で、<社会

的地位によって区別し、地位の低い人にはあいさつせず、感謝を言葉にしない風潮>のあることを示すものといえよう。クラスター2は「相談しにくい」～「いいたいことをちよくせついうからわかりやすい」の3項目で、<相手への傾聴がなく、直裁に自己主張する風土>を示唆するといえよう。クラスター3は「母語といっしょによく英語を使う」と「ほとんどの人が英語がわかるから外国人にとってあんしん」の2項目で、使用言語の違う民族間の融和が課題であり、外国人には好印象を持ってもらいたいのであろう、とのこと。)クラスター3は、<連結語としての英語の使用と外国人への配慮>からなるといえよう。

\*\*\*\*\*

#### 総合的考察

上記8つの研究結果を通して、対人コミュニケーション・スキーマについて、日本人の共通性、留学生の出身国の特性の多様性を知ることができたといえよう。海外の多くの国では、日本のような、対立を避け融和を得るため他者に気遣い、自己主張を抑制し、丁寧で曖昧で婉曲的な表現をとることをしない。感情や意見をストレートに表現し、反対意見も主張して意見交換するのが自然である。しかしながら、研究(2)のルーマニア人留学生の事例が示すように、日本的なスキーマを肯定的に評価する国もある。ルーマニアや研究(8)のスリランカの事例が示すように、対人コミュニケーション・スキーマには、使用者の属する社会の歴史的文化的背景が大きく影響しているし、研究(7)の韓国での事例が示すように変容していくものであるといえよう。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 8件)

- ① 内藤哲雄 日本人との対人コミュニケーションでの葛藤：ロシア人留学生のスキーマのPAC分析 日本応用心理学会第79回大会発表論文集, 77. (2012年9月)
- ② Naito, Tetsuo Analyses of Personal Attitude Construct on a Scheme of Japanese Communication Style. (*EFPA: European Federation of Psychologists' Associations*) *The 13<sup>th</sup>*

*European Congress of Psychology (Final Program)*, 227. 査読あり (12 July, 2013)

- ③ Naito, Tetsuo Analyses of Personal Attitude Construct on the Difference of Scheme of Communication Style between Japanese and Indonesian. *The 10<sup>th</sup> Biennial Conference of Asian Association of Social Psychology*, (*Program Book*, 132) 査読あり (23 August, 2013)
- ④ 内藤 哲雄 日本人との対人コミュニケーションでの違和感：ベトナム人留学生のPAC分析 日本応用心理学会第80回記念大会発表論文集, 113. (2013年9月)
- ⑤ 内藤 哲雄 ベトナム人留学生による日本人の対人コミュニケーション・スキーマ 日本心理学会第77回大会発表論文集, 255. (2013年9月)
- ⑥ Naito, Tetsuo Analyses of Personal Attitude Construct on the Difference of Scheme of Communication Style between Japanese and Chinese. *MMIRA (Mixed Methods International Research Association) 2014 Conference*. 査読あり (28 June, 2014)
- ⑦ 内藤 哲雄 韓国人の対人コミュニケーション・スキーマ：韓国人留学生のPAC分析 日本応用心理学会第81回大会発表論文集 (2014年8月)
- ⑧ 内藤 哲雄 スリランカ人留学生による母国の対人コミュニケーション・スキーマ 日本心理学会第78回大会発表論文集 (2014年9月)

〔その他〕

ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

内藤 哲雄 (NAITO, Tetsuo)  
福島学院大学・福祉学部・教授  
研究者番号：20172249

##### (2) 研究分担者

研究組織の構成員は研究代表者の内藤哲雄1名だけであり、分担者はいない。